

オホーツク文化の船形住居

トコロチャシ跡遺跡オホーツク文化9号住居跡の復元

A Boat-shaped Dwelling from the Okhotsk Culture

Reconstruction of Pit-dwelling No. 9 in Tokoro Chasi Site

大給 友樹・今城 愛・浅川 滋男

OTABI Yuki, IMAJO Ai, ASAKAWA Shigeo

和文要旨：道東オホーツク海沿岸の北見市常呂町には、国指定史跡常呂遺跡を中心に3千基以上の竪穴住居跡が地面に凹みを残した状態で確認されている。現在、史跡指定・整備の準備を進めている近世アイヌ期のトコロチャシ跡遺跡でも、下層にあたるオホーツク文化期の焼失竪穴住居が複数みつかり、本研究は同遺跡のオホーツク文化9号住居(c期)を復元する試みである。まずはオホーツク文化の住居に関する研究史を整理した上で、9号住居の遺構を分析し、その形状の特徴から同期の住居跡を「船形住居」と命名する。上屋構造の復元にあたっては類例遺構に残る建築材料の痕跡を集成し、民族学的な知見を加えて模型制作と基本設計をおこなった。最後に、今回の復元案と従来の復元案を比較検討し、今後の課題を整理した。

【キーワード】オホーツク文化、トコロチャシ跡遺跡、船形住居、四脚構造

Abstract : There are more than 3,000 remains of pit-dwellings in the area of the nationally-designated historical landmark Tokoro-iseki, located in Tokoro-cho, Kitami. Presently, although the designation and preservation of Ainu ruins is proceeding, Okhotsk culture era ruins in the lower strata have also been discovered. This research attempts to reconstruct an Okhotsk era dwelling from the Tokoro Chasi site. After researching extant materials on Okhotsk culture dwellings, and analyzing the remains of dwelling number nine, the dwelling has been named a "boat-shaped dwelling" based on its shape and resemblance to other structures of the same period. Gathering information on the vestiges of building materials, etc. remaining from the time of the reconstruction of the roof, as well as ethnological data, a preliminary design was created. Next, comparing the resulting design with other, pre-existing designs, adjustments were made to the preliminary design.

【Keywords】Okhotsk Culture, Tokoro Chasi Site, Boat-shaped Dwellings, Four-legged structure

1. 研究の目的と概要

1.1 北海道の先史文化と住居の変遷

北海道に弥生文化は存在しない。縄文晩期に大陸から稲作技術をともなう文化複合が日本列島にもたらされ、弥生時代になって、その波はまたたくまに青森にまで及んだが、津軽海峡を越えることはなかった。北海道で縄文文化に後続するのは「続縄文文化」であり、本州が律令期に入るところ「擦文文化」に変容していく。住居はい

ずれも竪穴式で、縄文～続縄文期の円形平面から擦文期の方形に変化する。擦文文化の方形竪穴住居は本州東北地方の古墳時代～古代の住居形式に影響を受けていると言われ、東北・北海道に残る古代方形住居は焼失遺構の炭化材配列や焼土層からみて、その大半は土屋根に復元される。

北海道に擦文文化が栄えていたころ、遠い海の彼方から海獣狩猟を生業とする集団が道東の沿岸域に押し寄

せ、擦文文化の担い手と抗争をくりひろげていた。いわば先住定住民と漂海民の軋轢がそこにはあり、後者が岸边近くに定着して残した文化を「オホーツク文化」と呼ぶ。厳密に言うならば、オホーツク文化は3世紀から13世紀までオホーツク海沿岸を中心とする北海道北半、樺太、南千島の沿海域に栄えた。司馬遼太郎は『オホーツク街道 街道をゆく 38』(朝日文芸文庫、1997)のなかで、日本書記にいう蝦夷(えみし)が擦文文化の担い手、肅慎(みしはせ)がオホーツク文化の担い手にあたる可能性を示唆している。『晋書』の東夷伝にみえる肅慎(しゅくしん)がアムール川流域の古代狩猟民であることを知っている者ならば、司馬の推察に心ときめかされるが、いまのところ「みしはせ」と「しゅくしん」との関係は立証されていない。

さて、オホーツク文化の住居もまた竪穴式ではあるけれども、日本全国のどこにも存在しない不思議な形をしている。その平面形は不整六角形と呼ぶべきもので、妻側片方の先端が鋭角的に飛び出しているのに対して、もう一方の妻側の先端はわずかしき外にでていない。この形はおそらく船を意識したものであろう、というのがわたしたちの見解である。六角形をなす深い竪穴の斜面を斜めに削りこめば、穴の立体形状は船底そっくりになるからである。また、マストをイメージさせるような棟持柱を妻側両端にもつことも特徴の一つであり、屋根はシラカバの樹皮葺に復元される。六角形平面が船の暗喩で

あるか否かについては異論もあろうから断定的な表現はひとまず控えることにして、以下の点を強調しておきたい。擦文文化がそのまま近世アイヌ文化に進化するわけではなく、擦文文化とオホーツク文化の担い手たちが対峙しつつ融合していく結果として、近世アイヌの文化が生まれる。とりわけ9世紀以降、オホーツク文化は擦文文化の影響を受けて大きく変容する。その文化を「トビニタイ文化」と呼ぶ。ここでまた住居も変化する。突出の短い妻の片側が直線になって、平面は五角形が主流を占めるのである。方形(擦文)と六角形(オホーツク)の融合として、五角形平面が登場したという見方が許されるかもしれない。そのトビニタイ文化も13世紀になると擦文文化に完全に吸収されてしまう。

1 2 トコロチャシ跡遺跡の整備と本研究の目的

北海道北見市はトコロチャシ跡遺跡の史跡指定・整備の準備を進めており、2008年に浅川研究室へオホーツク文化9号住居(c期)の基本復元設計を委託した。大給友樹(当時本学環境デザイン学科3年)はこの復元設計の担当者として、同年8月20日から9月1日まで北見市教育委員会でインターシップをおこなった。インターシップの前半ではトコロチャシ跡遺跡で発掘調査に参加し、考古学とオホーツク文化の基礎を学び、後半では常呂町埋蔵文化財センターで資料収集し、近隣の復元建物を視察した。本研究は、インターシップでの経験と資



図1 トコロチャシ跡遺跡 竪穴配置図 整備地域土地利用図(案)より



図2 常呂町埋蔵文化財センター 展示復元模型

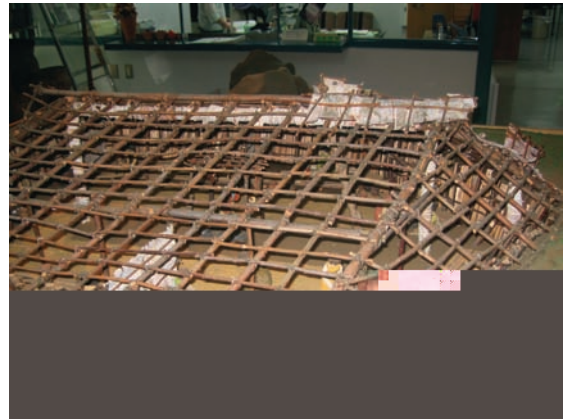


図3 同左

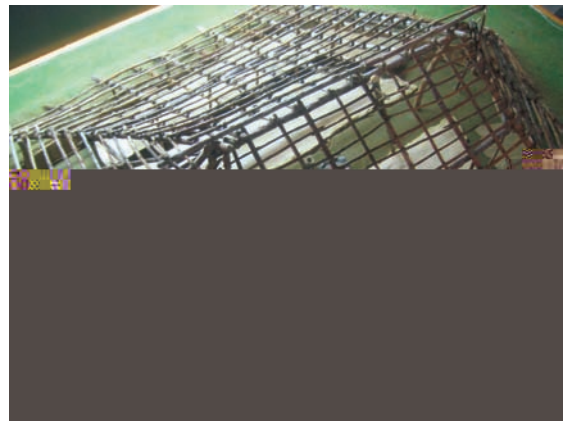


図4 オホーツクミュージアムえさし 復元住居

図5 ところ遺跡の館 展示復元模型

料収集に基づき、トコロチャシ跡遺跡オホーツク文化9号住居(c期)の復元案を示すものである。

トコロチャシ跡は、その名のとおり、アイヌ文化の砦跡の遺跡である。海岸に近い小高い丘の上に城柵を築く防御性の高い砦跡に加え、アイヌ期に先行するオホーツク文化の竪穴住居もいくつかみつかり、両者を複合的に遺構表示することが史跡整備の課題の一つとなっている。

オホーツク文化の住居については、おもに平面構成に関わる大井晴男[1979]、藤本強[1982]、武田修[1996]らの先駆的な業績がある一方で、上屋構造の復元は、標津町ポー川史跡自然公園(トビニタイ文化)、常呂町埋蔵文化センターの復元模型(オホーツク文化)(図2・3)、オホーツクミュージアムえさし(オホーツク文化)の部分的復元建物(図4)などが先行事業としてあるものの、いずれも復元の方法やプロセスに関わる情報はほとんど公開されていない。本研究は、9号住居の復元について遺構解釈から復元設計にいたるプロセスを詳細に論述するものである。オホーツク文化住居に関するこの種の建築考古学的研究がこれまでなされていない点をまずは特

記しておかなければならないだろう。

1.3 オホーツク文化の住居空間

すでに述べたように、オホーツク文化の住居跡は、五角形もしくは不整六角形の平面を呈し、中央に石囲炉か木柵囲炉を設ける。この炉をかこむようにしてコ字形の貼床がつくられている。藤本強は擦文文化の住居空間を分析するにあたり、主柱より内側を「内区」、その外周域を「外区」とよんでいるが、大井晴男はこの用語をオホーツク文化住居にも適用し、内区を共同のユーティリティ・スペース、外区のうち出っ張りのある妻側を祭祀空間、長い平側を個人的な居住空間とみる(図6)。

オホーツク文化の住居は、やや出っ張りの弱い妻側外区の中央に、必ず骨塚を設けている。ヒグマをはじめエゾシカ、キタキツネなどの頭骨の集積であり、神聖な場所としての祭祀的空間と関わる遺構と考えられる。北見市常呂町の常呂川河口遺跡15号竪穴住居(焼失住居)では、骨塚の周辺床面から特大型の土器が出土したり、オオムギ、アワ、キビなどの種子が多数出土するケースもあり、武田修はこの特大型土器を骨塚とかかわる祭器も

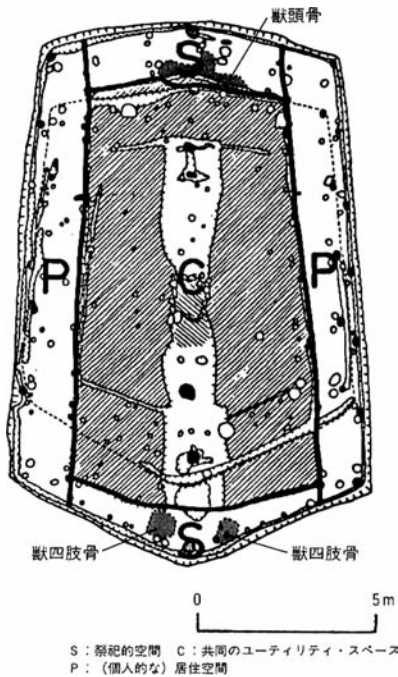


図6 オホーツク文化住居の空間分節案 (大井晴男1979)



図7 常呂川河口遺跡15号竪穴住居出土遺物分布図 (武田修1996)

しくは拡大家族の共用物とみなしている。

遺物は外区に集中して発見される。15号竪穴住居の例においても、大型土器・中型土器・小型土器・鉄器・青銅製品・骨角器・石鏃・削器・木製品が6つの区域にそれぞれセットで分かれて出土している。武田修はこの竪穴外区の領域を ～ 域に分け、域を骨塚を中心とする祭場、～ 域の6域を核家族(単位集団)の居住空間とみて、全体では6家族が集住した拡大家族と推定している(図7)(武田修2006:p.126、図54参照)。

入口については明確な痕跡がない。カムチャツカ半島や北米の先住民に特有な天窓出入の可能性も想定されている(図2)が、常呂川河口遺跡15号竪穴住居などでは、屋根材と推定されるシラカバの樹皮が出土しており、屋根が樹皮葺だとすれば、足場の強度からしても天窓出入りは考え難い。内区の貼床部分がコ字形を呈し、貼床のないコの字の開口部の領域が骨塚とは反対側に位置している点を北方ユーラシアのテントや竪穴住居と比較するならば、出っ張りのきつい妻側に入口があったと考えるべきであろう。なお、大井晴男は、トコロチャシ跡遺跡1号竪穴などで獣頭骨を集積した骨塚の反対側の妻側外区に、獣四肢骨の堆積の堆積が認められることから、両妻側を祭場と推定している。これは、住居空間を身体になぞらえ、奥を頭、出入口を足とみなすアイヌ住居のシンボリズムに似ており、同じように身体の隠喩を思わせることから、獣四肢骨の堆積した妻側が入口であっても矛盾はない。

2. オホーツク文化9号住居跡について

2.1 9号竪穴の層序と平面プラン

2001年度～2002年度に東京大学文学部考古学研究室がおこなったトコロチャシ跡遺跡オホーツク文化9号住居(8～10世紀ころの遺構)の発掘調査では、前年までに調査を終えた7・8号住居の南東部にあたる大型の凹みの位置にトレンチを設定した。ところが、過去の測量後に二次堆積土が積み上げられたため、現地表面では凹みが確認できない状態であった。二次堆積土を除くと、住居床面までの覆土の厚さは住居中央部・壁際とも約60cmであった。竪穴住居内覆土の基本層序は、以下のとおりである。

層：表土層(二次堆積土を含む)

層：暗褐色土層

層：黒褐色土層

層：炭化物・焼土・粘土粒が混在する茶褐色土層

トレンチの北西側では、層中に白色火山灰が薄くまばらに堆積する部分があった。また、住居の北面壁際、六角形の頂点付近に相当する位置の層下部～層上面には海獣骨を中心とした動物遺体の集中がみられたが、床面よりはかなり高い位置にあった。

竪穴住居は火災をうけて全体的に燃えていたが、粘土の貼床及び壁材・柱材の遺存状況はそれほど良好とはいえない。貼床は、北側の一部でレンガ状に硬化している部分が遺存していた他は、ぼろぼろに風化していた。住居の壁を構成していた樹皮・板材も、住居北面・西面の壁際では炭化した状態で遺存している部分もあったが、他の部

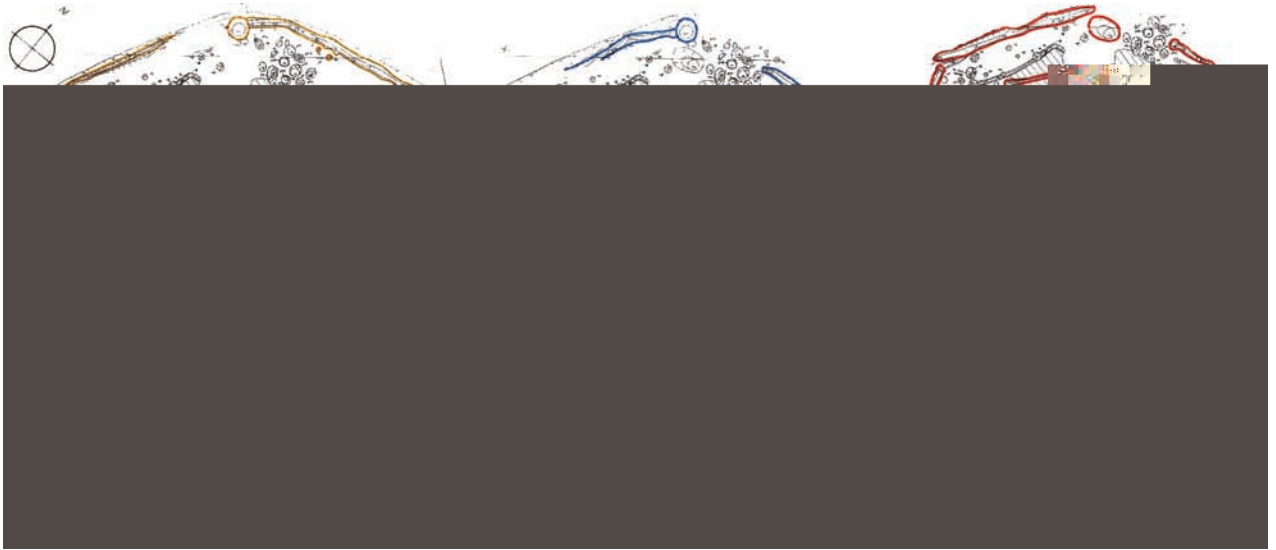


図8 9号竪穴住居変遷図 左からa期(黄)・b期(青)・c期(赤)

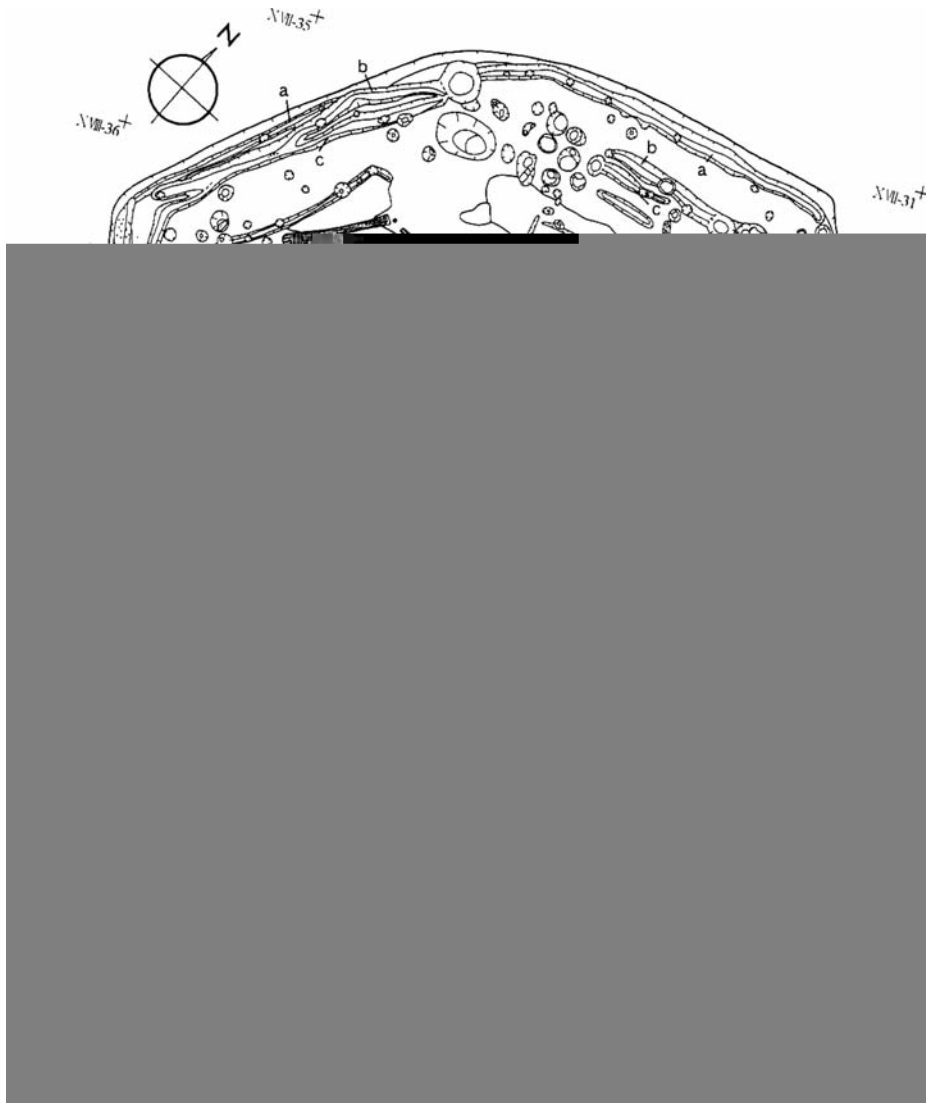


図9 9号竪穴住居遺構図 報告書の原図(宇田川洋2003:p.20、fig.10)では9a骨塚と9c骨塚が入れ替わっていたため修正した

図10 ウ区南北サブトレンチ セクション図 東京大学文学部考古学研究室提供の遺構図から作成

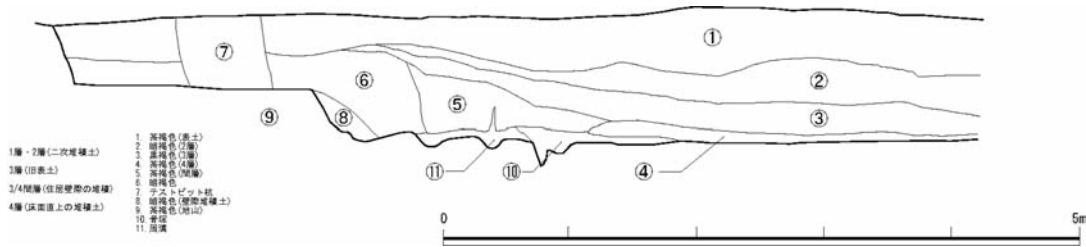


図11 3区南北セクション図 同上

分では材の一部が痕跡として認められる程度であった。

住居の周溝は複雑に切り合っている。遺存する壁材の位置から判断して、少なくとも3回の建て替えないし改築があったと考えられる。これらの建て替えは住居の縮小および長軸中心軸の平行移動をともなっており、基本的には外側が古く内側が新しい。古い順に9a号・9b号・9c号とすると、最も大型の9a号が最初に構築され、次に長軸中心軸を南西側に平行移動しつつ縮小して9b号を構築し、続いて9b号をわずかに内側に縮小して9c号に作り替えている。9a～9c号の建て替えに合わせて貼床や炉も変更されている(図8)。

住居の規模については、9a号の長軸が竪穴上端部で12.4m、下端部で11.9m、短軸は下端部で9.2m～8.4mを測る。9b号は長軸10.5m、竪穴下端部の周溝部分で測定した短軸は8.4m、9c号は長軸10.4m、短軸8.0m～7.8m(同じく下端部周溝部分)である。平面は、貼床開口部方向が強く張り出す不整六角形である。住居の長軸方向は9a～9c号とも北西である(宇田川洋2003)。

2 2 細部

柱穴

9c号住居に対応する2本の大きくて深い柱穴が確認されている。入口側の柱穴が直径約22cm、奥側の柱穴が直径19cm程度で、深さは約50cmを測る。これらは主柱穴と判断できる。ここに棟持柱を立てていたと考えられるが、これ以外では壁際に多数の柱穴が検出されているものの、住居の構造材として機能する柱を立てていたようにはみえない。興味深いことに北東(開口部)側にやや大型で深いサイズの柱穴(直径約10～20cm、深さ約30cm)

が10本ほど列をなして密集している。これについては、出入口などの施設が想定される。

壁の構造

丸太の外皮部分を残した厚さ3～6cmほどの板材を、外皮部分を内側に向けながら縦使いで並べて壁とする構造で、壁材と壁面(土の掘削面)の間に樹皮をあてる裏込も一部で確認されている(図12 宇田川洋2003 : p. 20)。

貼床

古い貼床の上に新しい貼床を重ねた部分と、その貼床をさらに成形し直している部分が確認でき、少なくとも2回の改修が認められる。レンガ状に硬化して遺存している一部以外では、ぼろぼろに風化しており、貼床の範囲や形状は不明瞭である。だが、粘土粒が散っているような状態で痕跡が残されている部分からみるに、貼床の当初範囲は、他のオホーツク文化住居がそうであるように、炉を囲む「コ」字形の部分に復元できるだろう。最も新しい貼床の周溝には、板状の炭化材が遺存している部分がある。木枠のようなもので囲まれていたのかもしれない(宇田川洋2003 : p. 21)。

炉

住居の中央付近には、南北に隣接するようにして炉が2ヶ所で検出された。北側の炉は正方形の石組で、平面は約1.3m四方。この北側の炉は、遺存状態などから判断して9c号の時期に対応する可能性が高いと報告されている(宇田川2003 : p. 21)。一方、南側の炉は遺存状態が悪いため、炭化材がわずかに確認されただけであった。本来は一辺1m前後の正方形であり、周囲を木枠で囲んだ炉であったとされる。炭化材が断片的にしか確認できないような遺存状態の悪さから考えると、北側の石

組炉より古いものなのかもしれない(宇田川洋2003)。

骨塚

骨塚は9a号と9c号のそれぞれに対応するように遺存していた。9a号の骨塚と思われる部分は、主柱穴の前に形成されていた痕跡を確認できる。その範囲は約0.5×1mの横長長方形で、底面には板状の炭化材、周囲には木枠状の炭化材が残っている。木枠をもつ祭壇状構造物の上か内部にクマなどの動物骨を堆積させていたのだろう。9c号の骨塚は住居長軸上にあつて、奥壁に接する部分に位置する。範囲は長軸方向2m×短軸方向1.3mほどで、焼けた骨や土器が堆積している。9c号骨塚の最下面ではヒグマの下顎骨も一体分安置されていたという。また、住居の北面壁際にあたる六角形頂点付近の層下部～層上面には海獣骨を中心とした動物遺体の集中的な堆積がみとめられる(宇田川洋2003:p.19)。この動物遺体の堆積が、獣頭骨を集積した骨塚の反対側の妻側外区に位置していることから、両妻側を祭場として住居空間を身体になぞらえ、奥を頭、出入口を足とみなす身体の暗喩が9号住居でも認められる可能性がある。

部材の樹種

9c号住居には樹種に関する詳細なデータがないため、常呂川河口遺跡15号竪穴住居の例から構造物材を紹介しておく。ナラ属、ナナカマド属、ニシキギ属などの硬木に限定されている。板壁材には比較的割りやすいモミ属やイチイを使用していた。これらの樹木を9c号住居に用いていた可能性が考えられると同時に、屋根にシラカバの樹皮を用いているので、シラカバの木を構造物材や壁材に使っていたと考えることもできるだろう。

3. オホーツク文化9c号住居の復元考察

3.1 旧地表面と周堤の復元

旧地表面の復元

ほとんどの発掘調査現場において、遺構検出面は旧地

表面から若干掘り込まれたレベルにある。かつての生活面は、後世の整地などによって削平されているのである。そのため、まず旧地表面のレベルを復元することが必要になる。9号住居の場合、遺構検出面から竪穴床面までの深さは約70cmだが、他の出土例に比べればやや浅く、旧地表面から20～30cm程度の削平を受けていると判断し、旧地表面から床面までの深さを約1mに復元した。

周堤の意味と規模

さて、オホーツク文化の住居に周堤が存在したという証拠は未だみつからない。しかし、周堤がないなら小屋組を固定することはできない。周堤は小屋組の垂木尻を動かないようにするための基礎であり、時代や文化を超えて必要な竪穴住居構造の一つであるとわたしたちは考えている。この場合、小屋組を地面上に築いてから垂木尻に土を塗り固めていく。周堤を築いてから垂木材のための穴を掘るのではない。周堤の幅は一般的に周堤溝と竪穴壁の距離によって計算できる。オホーツク文化の場合、周堤溝はみつからないので周堤幅を復元できないが、一般に竪穴掘削土の量と周堤の土量には相関性があると言われている。本稿では、弥生時代住居跡などにおける周堤規模や9c号住居の深さから判断して、周堤の幅を2.5～3.0m、高さを約65cmに設定する。

3.2 平面の復元

船の暗喩としての竪穴住居

オホーツク文化住居の竪穴平面は不整六角形を呈する。はじめに述べたように、入口側の出が大きく、奥壁側の出は短い。この形状特性、すなわち出の長い前方妻側を「舳先」、出の短い背面を「艫」に見立てることができる。船に乗って海の彼方からやってきた海獣狩猟民たちは、陸地に定着する以前、船に住みながら海を移動していた。船こそがかれらの住まいであった。だから、陸地に定住してからも、住まいとしての船が感覚として



図12 壁材と壁面間の樹皮



図13 板壁の構造

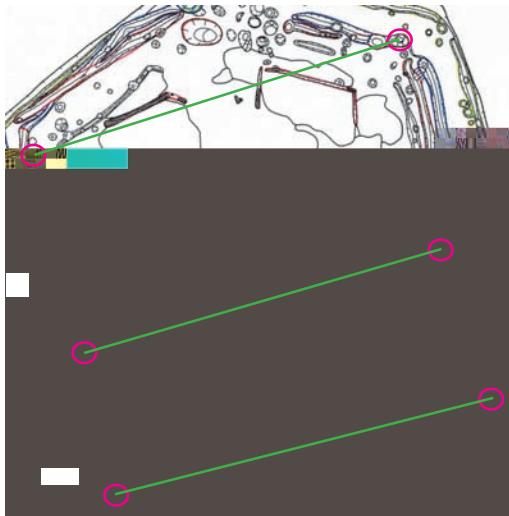


図14 9c号住居における壁際柱と梁

共有され、その結果、船の形をした竪穴を掘り込み、艫と舳先にマスト（支柱）を立てたのではないかとわたしたちは想像している。

9c号住居に対応する2本の支柱穴には、もちろん棟持柱を立てる。支柱を両妻側の中央に立てると、屋根は切妻造になる。さらに、屋根の平面の形状にあわせるなら、船のような形をした切妻造になるだろう。

壁際に支柱と呼べるほど立派な柱穴を見つけることはできなかったが、両壁際に3本ずつ、位置が平行関係にある柱穴を選びだすことには成功した。これらの柱穴に立てた柱の上を股木にして桁・梁をわたす。

壁の構造

外皮部分を残した板材の外皮部分を内側に向け、縦使いに並べて壁とする構造であることはすでに述べた。この壁の構造を竪穴住居外区の壁面を覆うように再現する。今回の復元では、さらにシラカバの樹皮を板材のむき出しの部分に横材とツルで固定して背もたれの仕上げを施した。7号住居においては、表面を外側に向けたシラカバの樹皮を壁の立ち上がり部分に沿って何枚も重



a. 板床 b. 板床の組み立て c. 板床の部
1. 支柱 2. 板床の桁 3. 敷板
この構造は夏季用住居の場合も同じである。

図15 トルイフの板床構造（加藤1986）

ね、さらにその内側に丸太材を並べていた形跡をみてとれるためである（図13）。板壁の高さについては、オホーツク人の身長や竪穴の深さから推定し、1.5m前後に設定する。

貼床と板敷

貼床部分の正確な形状と範囲を遺構図から読み取することは難しかったが、ある程度の推定はできる。遺存する貼床の範囲と木柱の延長線を照らし合わせながらコ字形に内区を囲んでいくのである。さらに、貼床の外側と竪穴壁面との幅については、人が居住スペースにできる範囲を確保するようにスケールを設定する。貼床の厚さについては、常呂川河口遺跡15号竪穴住居（常呂川河口遺跡1996）を参考にして4cm程度であると判断した。貼床は炉のまわりの作業場と考えればよいだろう。

貼床の外側にはベンチ状の板敷が設けられた。そこは拡大家族を構成する核家族もしくは個人単位の居住空間であり、遺物の多くはこのエリアから出土する。ここには床束のためのピットや炭化した床板などがしばしば検出され、ベッド状板敷の床下が土器などの収納場所となっていたと考えられている。9号住居ではその痕跡が鮮明ではないが、隣接する7号住居と8号住居ではベンチ状施設の痕跡がみとめられる。ただし、8号住居の場合、一部の板敷は床面に接していただろうとも報告されている（宇田川洋2003：p.16）。

これを民族学的にみると、ギリヤク族の半地下式住居「トルイフ」の住居内ベンチが参考になるだろう。『北東アジアの民族学史の研究』（加藤九祚1986）に図解されているギリヤクのトルイフ内部にはコ字形をなす板敷の揚げ床が描かれている（図15）。ここで9号住居に立ち戻ると、板敷に関わる床束ピットなどの情報は皆無であるが、8号住居の一部の板敷が「床面に接していた」可能性を尊重し、床束ではなく、転ばし根太を使った低い板敷に復元することにした。低いのが、構造的にはきわめて安定感のあるベンチである。この板敷は柱の基礎に

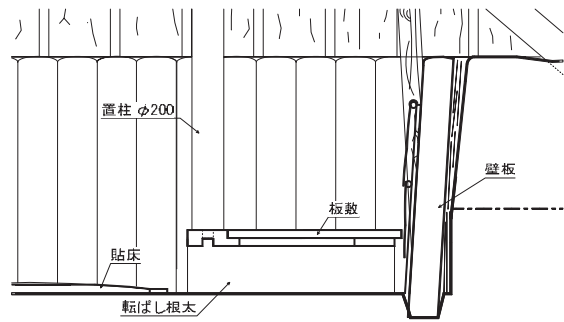


図16 板敷復元断面図



図17 9c号住居の骨塚

もなりうる。9c号住居の梁間規模は約10.4mと長いにも拘わらず、竪穴の内部には小屋組を支える柱の痕跡が存在しない。遺構の状況に従って柱を立てないと屋根が崩れてしまう。そこで、板敷の上に置柱を立てることにする。オホーツク文化の時代にはヤリガンナがすでにあった。ヤリガンナがあれば板も角材も作れる。だから、低い板敷の上に角柱を立てることにする。この柱は補助柱である。板と柱の底面の接合をどうしたのか、よく分からない。筋交状の金具や釘があれば最善であるけれども、そういう材があったという証拠は未だないようである。しかし、たんなる置柱だとしても、構造的に効果がないわけではない。断面図(図16)をみていただければ、置柱があるとないとで構造の安定性が大きく変わることをご理解いただけるだろう。今回は柱の下面にホゾ穴を削り出し、板敷に突き刺して安定させることにした。

置柱は間仕切りの役にも立つ。武田修(1996)があきらかにしたように、核家族間の領域区分を明確にするため、板敷の上を通っている置柱筋の梁に海獣などの毛皮をくくりつけ、簡易な垂壁を設けた。

骨塚

9c号住居の骨塚は住居長軸上の奥壁に接する部分に位置し、範囲は長軸方向2m×短軸方向1.3mほどで、焼けた骨や土器が堆積している。9a号住居に対応する骨塚が木枠に囲まれた祭壇状のものであったと読み取れるため、7号住居と8号住居の出土状況も確認しておこう。7号住居の場合、外側住居の骨塚は長軸ラインを中心に幅1.8mほどの床面に板材の痕跡がみとめられる。おそらく外側骨塚の下面は祭壇状になっていたと思われる。この外側骨塚ではクマの頭骨が壁側から内側に重ねて並べられた縦の列が数列確認された。頭骨から確認されたクマの個体数は100を超える。内側住居の骨塚は、骨塚下面に祭壇状の構造は確認できなかった。規模も小さく、クマ頭骨が配列された様子もみとめられない。ただし、オホーツク文化の土器が出土している(宇田川洋2003:p.



図18 9c号住居における動物遺体の集中箇所

15)。8号住居の場合、骨塚は南東の奥側と、その反対側にあたる貼床開口部のやや東寄りの壁際で見つかった。奥壁の骨塚は支柱穴の前面から貼床までの間を中心にひろがっており、一部は貼床上までひろがっていた。貼床開口部の骨塚は、50×60cmほどの木枠の上に集積された小規模なもので、ヒグマの四肢骨が出土している。以上から、9c号住居も木枠囲いの祭壇状骨塚であった可能性を否定できない。加えて、海獣骨を中心とした動物遺体の集中が、骨塚の反対側の妻側外区に位置していることから、両妻側が祭場になるように復元設計を進めた。

出入口

9c号住居の遺構図をみると、北東側で9c号住居の周溝が途切れ、やや大型で深い柱穴が10本ほど列をなして密集している。調査担当者はこれを出入口の痕跡とみている。入口がどのような構造だったのかは分からないが、本復元案では海獣の皮を暖簾のように何枚も重ねて垂らしている。後述するように、屋根材と推定されるシラカバの樹皮が住居内部で点々と出土しており、竪穴住居を覆う屋根は樹皮葺に復元できる。本州の先史時代や北海道の擦文時代の焼失住居には、焼けた屋根土の層が鮮明に残っているが、オホーツク文化の焼失住居にそういう土層はみとめられない。したがって、住居内で検出されるシラカバの樹皮は土屋根の下地ではなく、屋根材そのものだと考えられる。樹皮葺の場合、天窓出入りは考え難い。足場の硬い土屋根だから天窓出入りが可能なのである。この点からみても、北方ユーラシアの古アジア語族や北米先住民に卓越する土屋根・天窓出入りの竪穴住居の構造とオホーツク文化の構造は大きく異なることは間違いないだろう。

3 3 上屋構造の復元

身体寸法と屋根勾配

屋根勾配には身体寸法が関わっている。いわゆる無文字社会では、身体の部位を寸法の単位とし、その倍数に

よって建物の縦・横・高さを決定している。先史社会においても、この方式が使われたのであろう。建物の規模・寸法に関わる復元のうち、平面的な縦・横については、遺構を読み取ることで復元しえるけれども、高さについては根拠を遺構に求めることはできない。高さについては、身体寸法と葺材にともなう屋根勾配の複合性によって推測する以外に方法はない。

オホーツク人の成人男性の平均身長が160cm程度である。梁・桁の高さについては、身長160cmの人の頭が接しない高さであり、建設工程にとっては、人が手を伸ばした高さより低いほうが望ましいだろう。実数で示すならば、オホーツク文化成人男性が手を伸ばした高さは約2mにあたる。したがって、梁・桁の高さを h とすれば、 $1.6\text{m} < h < 2.0\text{m}$ と想定されるのだが、建物が大型化すると、屋根勾配との関係から h の値を高めに設定せざるをえなくなるだろう。今回復元した9号住居も、一般的な竪穴住居に比してかなり大きいものであり、 h の値はやや大きめになることが予想された。

一方、屋根勾配については、シラカバの樹皮葺の場合、常識的には5/10~7/10だが、道東は豪雪地域であり、樹皮屋根に雪が堆積するのを防ぐため、ややきつめの8.5/10に設定した。この結果、床面から桁・梁までの高さ(h)は2mとなった。

四脚構造とサス

遺構に適切な柱穴がないため、どのような上屋にすべきか悩まされた。このような場合、常識的には近隣の民族誌を参照する。最も参考すべき民族誌資料は北海道アイヌの住居チセであろう。アイヌのチセは草葺草壁の地上式掘立柱建物で、梁・桁上の左右対称の位置にケツンニ(図26)と呼ばれる三脚を立て、その頂点に棟木をわたす。こういう構造は北欧ラップランド狩猟民の楕円形テントなどと共通している。アイヌのチセやラップランドのテントの場合、屋根は寄棟系となる。これをオホーツク文化住居の屋根構造に採用できないわけではない。実際、常呂町埋蔵文化財センターに展示されているオホーツク文化住居模型は亀甲型の寄棟造に復元されている。しかし、妻側中央突出部に残る棟通りの柱穴は、床面に残る他のピットに比べてはるかに大きく、側柱の一つというよりも、棟持柱の可能性が高いであろう。これを、わたしたちは「舳先と鱸に立つマストのような柱」と呼んだわけだ。こういうマストのような長い棟持柱が立っていたとすれば、屋根は寄棟造にはなりえない。切妻造しかありえないであろう。切妻造に、ケツンニは使い難い。三脚のうちの1本が棟持柱の位置とパッチングするため、「舳先」や「鱸」にあたる部分の構造材の納まりが良くないのである。これについては、実際にラ



図19 身体寸法と屋根勾配



図20 模型制作プロセス 周堤



図21 模型制作プロセス 四脚構造・サス



図22 模型制作プロセス 母屋取付

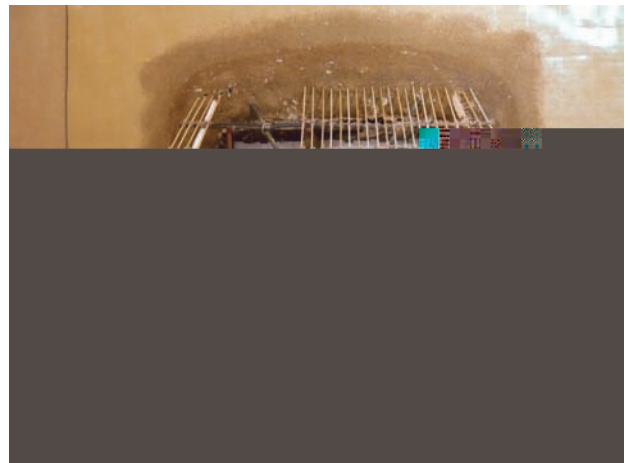


図23 模型制作プロセス 垂木取付



図24 模型制作プロセス 小舞取付



図25 模型制作プロセス 樹皮葺

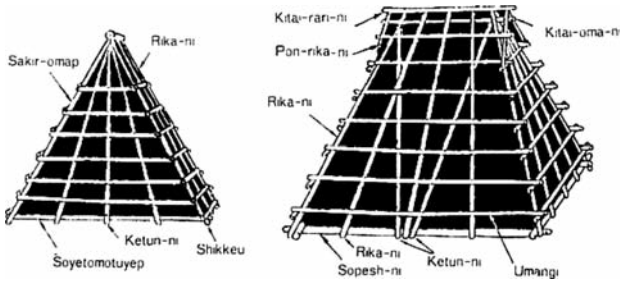


図26 ケツンニの構造 (大林太良1991)

フ模型を制作し、納まりの悪さを確認している。

さて、三脚は寄棟屋根に特有な小屋組というわけではない。その源流は円錐形テントの構造体にある。ただし、北方ユーラシアから北米の狩猟民住居としてひろく拡散している円錐形テントについては、構造体を三脚とするものと四脚とするものの両方あり、大型のテントについては四脚を採用する傾向がみとめられる [大林太良1991] (図26)。

三脚や四脚は転々と移動する居地に近い森で伐採した皮付きの丸太材で、末口に股木を残す。股木を相互に噛み合わせることで、構造は驚くほど安定する。今回のトコロチャシ跡遺跡オホーツク文化9c号住居は大型であり、両端の棟持柱とのバッティングを避けるために、棟木の中央を四脚で支える構造を採用した。筋交的な役割をもつ斜材が一つの頂点を共有し、前後左右対称に4本配されるのである。ただし、この頂点と2本の棟持柱の3点支持では棟木が不安定なので、四脚と棟持柱の間に二脚のサスを設けて棟木を5点で支持することにした。この場合、四脚と二脚(サス)を支えるのは、周堤以外では壁際の側柱でうける桁と置柱上の桁だけであり、この点からみても板敷上の置柱はぜひ設けたい。

四脚と二脚(サス)の上にはモヤをわたし、その上に垂木を架けて屋根を葺く。

屋根の復元

9号住居には、垂木などの屋根に関わる炭化材や焼土がほとんど残っていない。それは、9号住居が土屋根ではなかったことを示すものである。一方、9号住居の床面には焼けたシラカバの樹皮が点々と散乱しており、屋根はシラカバの樹皮葺であった可能性が高いであろう。垂木のスパンは不明ながら、常識的な寸法として1枝=30cmとして配列した。垂木上の小舞は25cmスパンで水平にわたし、幅60cm×長さ90cmのシラカバの樹皮を葺き重ねた。樹皮葺というと、雨仕舞に難がありそうな印象を覚えるが、葺足を長くすることによって十分防水できる。

なお、ケラバ部分では垂木を外転び扇状に配列した。転びは入口側(舳先)で約10°、奥壁側(艫)で約5°と



図27 ポー川自然公園のトビニタイ文化復元住居

した。こうすることによって、屋根は船形切妻の外観を獲得し、平面の不整六角形とも見事に対応する。地面上の外観が船の形状に近くなるだけでなく、内部は六角形の船底のようになり、「船としての住まい」が強く意識されるのである。

4. 復元案の整理と比較

以上、遺構平面の分析から出発して、類例・民族例を参照しながら、トコロチャシ跡遺跡オホーツク文化9c号住居の復元案を呈示した。今回、「船としての住まい」を復元のコンセプトとして徹底してきたが、それは思い付きのものではなく、平面の特殊な形状と棟持柱の存在を重視した結果である。このコンセプトのもとに復元した9c号住居の復元案は、標津町ポー川史跡自然公園に建設されているトビニタイ文化の復元住居(以下「ポー川復元建物」と略称)とよく似ている。ただ、両者に違いもある。まずポー川復元建物には周堤がなく、9c号住居の復元案には周堤がある。すでに述べたように、周堤は竪穴の掘削土を用いた小屋組の基礎であり、竪穴住居研究の現状を踏まえれば周堤は竪穴住居に必要な要素と考えられる。また、内部の板敷上に置柱を立てたことも9c号住居復元案の特徴であり、ポー川復元建物にはみられない。この置柱が存在したという証拠はどこにもないが、建築構造の安定性を求めるならば、あるとないでは大違いであり、今後の史跡整備にともなって遺構上に復元建物を建設することになるだけに、置柱の必要性を説いておきたかったのである。

このほか、小屋組に四脚と二脚(サス)を併用した点などについても異論を招くかもしれないが、一次資料の欠落する部分であるから、他に有力な小屋組のあり方が提案されるならば、それを否定するつもりはまったくない。

オホーツクミュージアムえさしの展示室にもオホーツク文化住居の原寸復元がなされているが、部分的な復元であることから構造の全体像を理解し難い。よって、こ

ここでは比較検討の対象から除外する。一方、東京大学文学部考古学研究室が復元した常呂町埋蔵文化センターのオホーツク文化住居模型は上部構造を詳細に表現している（以下「東大復元案」と略称）。東大復元案と今回の9c号住居復元案は大きく異なっている。前者は緩い寄棟造屋根に天窗を設け、そこから出入する構造に復元している。この復元模型については、寄棟造の屋根と棟持柱の可能性が高い2本の主柱が矛盾することをすでに指摘した。また、土屋根に復元できない建物が天窗出入になるはずはない。さらに緩い勾配の屋根である点が非常に気にかかる。豪雪地帯の建물에緩い勾配の屋根を採用すると屋根上に雪が堆積して根雪となり、内側の熱気との接点である葺材から雨漏りが生じやすくなる。ひいては小屋組の崩落を招くであろう。豪雪地域にあっては、常識的な勾配よりも屋根の傾斜をきつくしなければならないのである。

このようにトコロチャシ跡遺跡9c号住居復元案を既存の復元案と比較すると、東大復元案とは大きく異なり、ポー川復元建物との共通点が少なくない。結果としてみるならば、9c号住居復元案はポー川復元建物のコンセプトを継承し学術的に補強したものという評価を将来受けることになるかもしれない。

オホーツク文化の竪穴住居は、日本列島の全域に分布した先史～古代の竪穴住居のなかできわめて特殊な位置を占める。それは他の地域・文化のどこにもない「異端

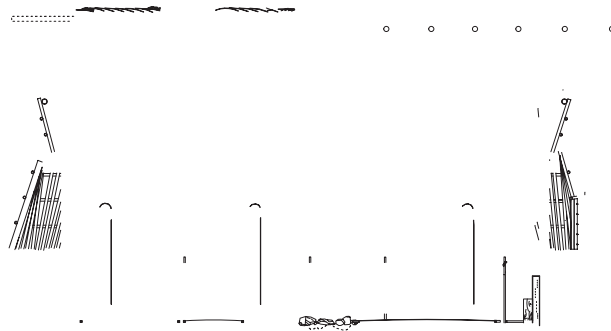
の住居」である。こうした住居の復元に携わることができたのはまことに幸運であり、本研究がオホーツク文化住居の研究史にわずかなりとも新しい視点をもたらすことができたとすれば大きな喜びである。

附記

大給が2008年の夏休みに北見市教委でインターンシップをおこなった後、同年後期から9c号住居の復元模型（1/20）の制作に着手した。妻木晩田遺跡竪穴住居復元模型の制作経験がある今城が大給を指導しつつラフ模型の制作～CAD設計図作成を数度繰り返し、最終案となる模型の制作は大給・今城に加えて宇田川恭平・門脇史知・森吉宏・吉川友実が補佐した。その後、2009年3月6日、北海道北見市の常呂町多目的研修センターで開催された「史跡常呂遺跡整備専門委員会議」において、大給が最終案模型を示しつつ9c号住居復元の方法と成果を口頭発表した。本稿はそのときの発表内容に加筆修正したものである。末筆ながら、終始手厚いサポートをしていただいた北見市教育委員会の武田修さんと山田哲さんに対し、この場を借りて感謝の気持ちを表したい。また、佐藤宏之教授、熊木俊朗准教授をはじめとする東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室の皆様には多くの資料と情報をご提供いただいた。また、本学のベゴール・ベッティーナ准教授には英文要旨の作成をご指導いただいた。ここに感謝申し上げます。



図28 北側からみる復元模型全景



柱穴がある柱は全て末口を示す



図29 9c号住居 復元桁行断面図(A-A') 1/150

図31 9c号住居 復元平側立面図 1/150

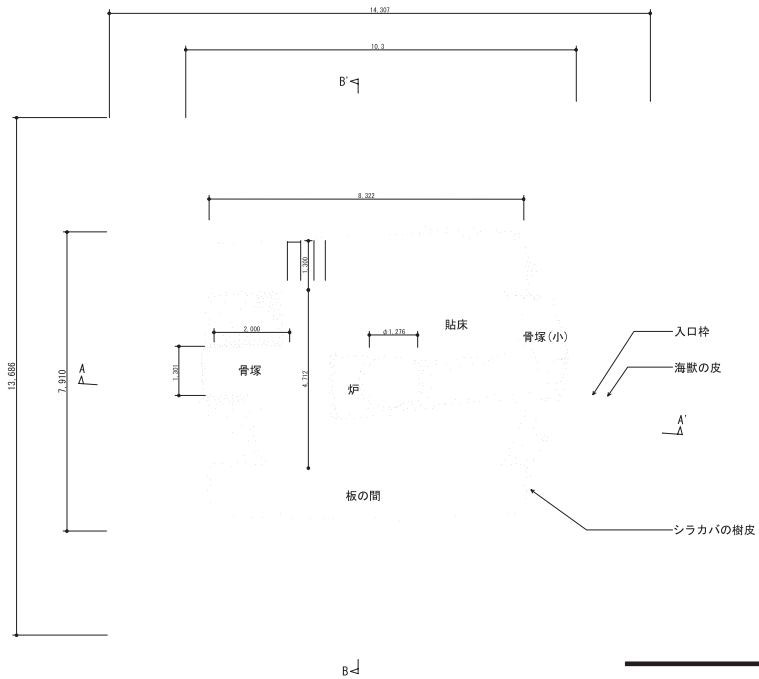


図33 9c号住居 復元平面図 1/200

表1 資料別データ一覧

宇田川洋「居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の調査』、2003

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
トコロチャシ跡遺跡 オホーツク地点	7号竪穴 外側住居	上端部の推定長軸13.5m 短軸は9.7m 下端部長軸12.9m 短軸8.5m	中央部北西地域約60cm 南側壁際約120cm	炭化した樹皮・板材 表面を外側に向けた 白樺樹皮を壁の 立ち上がり部分に 沿って何枚も重ね る。その内側に径 8~10cm丸太材、 周溝内部に立てて 並べる。(北西壁部 分) 丸太材の代わりに 厚さ3cmの板材使 用。壁を横方向の 材と丸太の立柱で 押さえている構造 (西壁・南西壁部分)	壁際に床面から 数センチの高さでベンチ 状施設。ベンチ 下下に木製品 収納	熱でレンガ状に硬化 a、b面 「コ」の字型	壁際やや高く 内部に向かって 緩やかに傾斜 長軸ライン中 心に幅1.8m ほどの板材の 痕跡。下面は 祭壇状に構築	内側住居 骨塚、貼床cと 壁際の間。規 模(小)		木枠状
	内側住居	下端部長軸8.5m 短軸7.4m								
	8号竪穴 (五角形)	下端部長軸約12m 短軸8.8m								
9号竪穴 a	長軸上端部12.4m 下端部11.9m 短軸下端部9.2~8.4m	中央部・壁際約60cm	丸太の外皮部分 を用いた厚さ3~6 cmほどの板材縦に 並べる 壁材と壁面の間 に樹皮を当てる構造		2回改修 「コ」の字型 木枠囲い	北部壁際動物 遺体集中 範囲約0.5× 1m横長長 方形、木枠 長軸方向2m 短軸方向1.3m	やや大型 で深い柱 穴10本ほ ど列をな して密集	南側・炉 木枠	北側・炉 石組み	
b	長軸10.5m 下端部短軸8.4m									
c	下端部長軸10.4m 短軸8.0~7.8m									

「常呂川河口遺跡」常呂川河口右岸掘削護岸工事に伴う発掘調査報告書、北海道常呂町教育委員会、1996

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
常呂川河口遺跡	14号竪穴 (六角形)	長軸約10.8m 短軸9.8m	約45cm			認められない	東壁にあり直 径約1.3m			中央に石 囲み炉約 1.5m
	15号竪穴 (六角形)	長軸14m 短軸10m	約50cm	幅10~30cmの板材検出・ベッドも しくは壁の土止め板 白樺樹皮、幅約30 cm長さ約50cm	幅・骨塚側約1.2m 概ね2m、厚さ3~4cm 「コ」の字型		奥壁中央部 白樺樹皮、 幅約30cm 長さ約50 cm木釘を 併用			石囲み炉

「常呂」、東京大学文学部考古学研究室、弥生会、1972

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
栄浦第二遺跡	4号竪穴 (隅丸の長方形)	南北13m 東西9m	周囲20cm		ベンチ的なものあり	「コ」の字型	クマ獣骨堆積 40×70cm 3カ所			石囲み 1.1×1.8m 厚さ15cm
	5号竪穴	約3m	約1m							
	6号竪穴									炉址(無)
	7号竪穴 (亀の甲型)	東西約10.5m 南北9m	1.8m			「コ」の字型	竪穴内の北より中央部 1.6m×1.3m			
	8号竪穴					「コ」の字型 厚さ約2cm				
	11号竪穴 (五角形)				斜めに掘り込まれている	無し				
	12号竪穴 (正方形)	一辺3.5m			丸太材が壁に斜めにつきささるように見出された	床板・それに変わる施設				周囲に煉

「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡下巻」、東京大学文学部、1964

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
トコロチャシ	1号竪穴 (六角形ないし五角形)	南・北壁12m 東壁11mの壁が中央、5.5mの2辺に分かれる 西壁8m 中軸15m	西側約1.5m 東側約1m 中央約80cm			「コ」の字型				

「栄浦第二・第一遺跡」、北海道常呂町教育委員会、1995

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
栄浦第二遺跡	25号竪穴 (六角形)	長軸約9.8m 短軸推定約6m	約1.1m			「コ」の字型 厚さ9cm	台状のものがある			大小2箇所 小炉直径75cm 大炉直径1m

「目梨泊遺跡」一般国道238号枝幸町斜内改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、枝幸町教育委員会、1994

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
目梨泊遺跡	第1号住居址 (五角形)	西壁長さ8.5m	高さ45cm	床面部分は北側80cm 南側1m10cm幅						
	第2号住居址 (正方形)									2m40cm ×80cmほどの掘り込み
	第3号住居址	南側4.5m 西側2.3m	40cm			見られない				
	第4号住居址 (五角形)	長軸11.7m 短軸9.34cm				見られない	見られない			中央部に1m20cm×1m石組炉

「松法川北岸遺跡」羅臼文化財報告8、羅臼町教育委員会、1984

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
松法川北岸遺跡	1号住居址 (五角形)		山側約1m・海側30cm			海岸線と平行している 南北約8m・東西約7m	見られない			石囲炉
	2号住居址	南北4.2m				厚さ1~3cm				直径1m
	5号住居址	南北6.7m・東西8m程度	30~40cm程			「コ」の字型 開口部は海を向く				
	4号住居址	横軸約12m				「コ」の字型				径1m石囲炉
	10号住居址									周囲の床より10cm程高い段を設け両側には柱穴が配されている
	11号住居址	南北(短軸)約9m程								
	12号住居址	短軸9.2m			角材・板は板壁状材料		開口部は海を向く			直径80cm前後石囲炉
	13号住居址			40~50cm以上	板壁		開口部は海を向く 12cm角の角材によって粘土縁辺部の崩壊防ぐ	最奥部中央直径1m内外		

「オンネモト遺跡」、『調査遺構』、根室市教育委員会、1974

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
オンネモト遺跡	1号竪穴住居址 (六角形)	長軸8.3m								
	2号竪穴住居址 (五角形)	長軸14.6m				貼床ではなく「砂場」	4カ所獣骨の集積発見			1×2m石囲炉

「ホロベツ砂丘遺跡」『遺構・遺物』、枝幸町教育委員会、1985

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
ホロベツ砂丘遺跡	第1号住居址 (六角形)					明瞭に確認 厚さ均等に6cm				
	第2号住居址 (五~六角形)	残存部規模 長さ1.1m 幅7.1								

「湧別町川西遺跡 北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査」、北海道立北方民族博物館、1995

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
湧別町川西遺跡	3号竪穴 (六角形)	長軸約8m・短軸約6.5m	旧地表面から50cm	立ち上がり急						
	2号竪穴 (将棋の駒型)		旧地表面から約1m			あった時期もあるが、その後の造り替えて剥離された可能性あり	動物の骨集積された場所あり			
	8号竪穴	約6.8×約6.5m	旧地表面から90cm			炉を取り巻く「コ」の字型	北西壁寄りに見られる			石組み炉

「根室市トーサムボ口遺跡 R 1地点の発掘調査報告書」、北地文化研究会、2004

遺跡名	住居遺構番号	平面規模	深さ	壁	床板	貼床	骨塚	屋根材	入口	炉
トーサムボ口遺跡 R 1	1号竪穴		中心部60cm							幅70cm・深さ5cm
	2号竪穴	幅5.6m 長軸3.8m								石組み 70cm
	6号竪穴 (六角形)	長軸6.4m 横軸5.9m	中心部70cm 西部50cm			貼床ではなく「砂場」				70×80cm
	7号竪穴 (六角形)	長軸6.0m 横軸4.55m	60cm 南東壁側40cm			貼床ではなく「砂場」			屋根上の出入り口を経て屋外に通じる梯子のビット見つかる	105×60cm
	13号住居 (五角形)	地上上面軸長6.16m 幅5.12m 床面軸長5.62m 幅5.06m 床面積約26～27㎡	0.75m～0.65m	幅30cm程度の板材を連続で打ち込んだ		中央部低く、壁際5～10cmせり上がる粘土床はなくローム面低い面のみ貼床	検出されていない			石田炉 1.06m×0.6m

参考文献

浅川滋男 編 (2001) 『竪穴住居の空間と構造』 奈良文化財研究所
 同 (2008) 『山陰地域の地域の弥生時代建築に関する実証的復元研究』 平成19年度とっとり 知の財産 活用推進事業成果報告書、鳥取環境大学浅川研究室
 宇田川洋 (2003) 『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』 東京大学大学院人文社会系研究科付属北海文化研究常呂実習施設
 枝幸町教育委員会 (1994) 『目梨泊遺跡』 一般国道238号 枝幸町斜内改良工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書
 大井晴男 (1976) 「オホーツク文化の船」 『北方文化研究』 第10号、北海道大学文学部付属北方文化研究施設
 同 (1979) 「オホーツク文化の竪穴住居址」 『三上次男博士頌寿記念論集』 同記念論集編集委員会
 同 (編) (1982) 『オホーツク文化の諸問題』 学生社
 加藤九祚 (1986) 『北東アジア民族学史の研究』 恒文社
 菊池徹夫 (1984) 『北方考古学の研究』 六興出版
 児玉作左衛門・犬飼哲夫・高倉新一郎 (1970) 「住居」 『アイヌ民族誌』 第一法規出版
 小林孝二 (2000) 「アイヌ民族の住居 (チセ) に関する

研究」 『北の文化交流史研究事業』 研究報告 別刷
 同 (2002) 「アイヌ民族の住居 (チセ) に関する研究 2」 『北海道開拓記念館研究紀要』 第30号
 武田 修 (1992) 「オホーツク文化期の焼失家屋」 『月刊文化財』 3月号
 同 (2006) 『常呂遺跡群』 同成社
 東京大学文学部考古学研究室 (1972) 『常呂』 弥生会
 野村 崇・宇田川洋 (2003) 『続縄文・オホーツク文化』 北海道新聞社
 北海道常呂町教育委員会 (1996) 『常呂川河口遺跡』 常呂川河口右岸掘削護岸工事にともなう発掘調査報告書
 北海道立北方民族博物館 (1995) 『湧別町川西遺跡』 北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査
 松井孝宗 (2004) 「北方世界からの視点」 『竪穴雑考 サハリンアイヌ・ニブヒの冬型住居から』 北海道出版企画センター
 米村 衛 (2004) 「モヨロ貝塚」 『北辺の海の民』 新泉社
 羅臼町教育委員会 (1984) 『松法川北岸遺跡』 羅臼文化財報告 8
 (受付日2010年3月16日 受理日2010年4月28日)